

おかしいまちがい

小川未明

青空文庫

ある田舎に、一人の男がありました。その男は、貧乏な暮らしをしていました。

「ほんとうに、つまらない、なにひとつおもしろいことはなし、毎日おなじようなことをして、日を送っているのだが、それにも飽きてしまった。」

男は、そう思いました。そして、あう人に向かって愚痴をもらしました。

これを聞いた人々の中には、

「これは、おまえさんばかりがそうなのではない、みんながそうなのですよ、しかし、いったからとてしかたがないから黙っているのですよ。」といったものもあります。

しかし、男は、それを聞いただけでは、あきらめられませんでした。もつと、おもしろいことや、しあわせのことがなかったら、生きているかいはないように考えました。

男は、お膳に向かつて飯を食べますときに、

「いつも、こんなまずいものばかり食っているのでは、生まれてきたかいがない。」と思いました。

また、仰向いて、家の内をじろじろと見まわしては、

「いつも、こんな汚らしい、狭い家に住んでいるようでは、生まれてきたかいがない。」

とおも
と思いました。

そして、男は、人の顔を見ると不平をもらしました。なかには、

「あなたのおつしやるとおりですよ、人間はいつまでも生きていられるものではありませんから、せめて生きている間だけでも、おもしろいめや、好きなことをしなくては、生きていくかいはありません。世間には、そうしたりっぱな暮らしをしているものもあるのですから……。」と答えたものもあつたのです。

男は、仕事をするのも、なんだかばからしくなつて、ぼんやりとして日を送っていますと、そのうちに秋となり、冬となりました。冬になると、雪が降ってきて、田も圃もまた家も、雪の中に埋もれてしまったのです。小鳥は、毎日のように枯れた林にきては、い声でさえずつていました。

「あんなに、あちらは雲切れがしていますよ。あつちへいったら、きつとおもしろいことがあるでしょう。」

こんなふうには、小鳥はいつているように聞こえました。するとある日のこと、男は、また人にあつて、

「ほんとうに、毎日、おもしろくなくてしょうがありません。もっと暮らしのいいところ

ろはないものでしょうか。」といいました。

すると、その人は、男に向かつて、

「おまえさん、旅へゆきなさんと、金がもうかるそうですよ。いま、あちらは景気がいいといえますから、きつと暮らし向きも、いいにちがいありません。」と答えました。

「旅といえますと、どこですか？」と、男はうれしそうに、どきどきする胸を押さえてたずねました。

この人は、雲切れのした、あちらの空を指さして、

「あの国境の山を越しますと、もう雪はありません。いまごろは、暖かい花が咲いています。そこへゆけば、いつだって仕事のないことはありませんよ。」と答えました。

男は、雪がないと聞いただけでも、もはやじつとしていられませんでした。さつそく、その旅へ出かける用意をいたしました。

「俺は旅へゆこう。そして雪のない、いい国で働こう。金がもうかり、おもしろいことがたくさんあって、いい暮らしができるだろう。そうすれば、俺は、もう一度この村に帰つて、みんな家も圃も売つて、後始末をつけて出直すつもりだ。そして、旅で一生を送ることにしよう。」と、男は考えました。

男は、家を閉めて、留守を隣の人に頼んで旅へ出かけたのであります。もとよりたくさんの旅費を持っていてはありませぬ。やつと、あちらへ着くだけの金しかなかつたのを懐に入れて出かけました。

男は、ただ、雲切れのした明るい空を望んで、道を急ぎました。山に近づくにつれて、雪はますます深くなりました。しかし一の山をあちらにまわれれば、雪がなくなるのだ、そして、そこには、暖かな風が吹いて、花が咲いている。そればかりでない、自分のかつて見たことのないような、美しい、にぎやかな町があるのだ。そこで自分は、いい暮らしをすることができぬ。きつと、その町の人は、遠くから出かけてきた自分をあわれんでくれるにちがいない。またしんせつにしてくれるにちがいない。ほんとうに、そうであつたら自分は、どんなにしあわせだろう？

男は、さまざまな空想にふけりました。そして幾日も幾日も旅をつづけました。男は、夜になるとさびしい宿屋に泊まりました。しかし、にぎやかな町や、たのしい生活のことを空想すると、男は、すこしもさびしいとは思いませんでした。

男がいなくなつた後は、村は雪にうずもれて、その家は閉まっています。そして、裏の木立には、いつもの小鳥がきて止まつて、男がいたときのようにさえぎっていました。

男は、山を越えて、あちらの村へ入ってきました。もうそこは雪が降らなかつたのです。けれど、花は咲くどころでありませんでした。寒い風が、林や森の上に吹いていました。

故郷にいる時分、明るい、なつかしい空の色は、その国に入つては見られませんでした。やはり、曇つたり、また晴れたりすることがあつても、明るい、オレンジ色のなつかしい空を毎日見ているわけにはゆかなかつたのです。男はにぎやかな町を探して歩きました。すると、やや大きな繁華な町があつたのです。

「どれ、この町に、いい仕事の口があるか、聞いてみよう。」と、男は、その町の人たちにたずねました。

町の人々は、この男のようすをつくづくとながめました。

「おまえさんは、この国のものでないようだが、どこからこられましたか。」とたずねました。

「私は山のあちらの国からやってきました。いま国のほうは雪が降っています。こちらへくれば仕事があつて、いいお金になるとききましたので出かせぎにやってきました。」「と、男は答えました。

町の人々は顔を見合せていました。

「それはうそですよ。こちらの不景氣といつてはお話になりません。みんなは、あちらの山をながめて、あの山を越すと雪はあるというが、今年は豊作で暮らし向きがいいという。こちらにほんやり遊んでいるよりか出かせぎにいったほうがましだといって、せんだつてから、もう何人も出かけましたよ。」と、町の人々は、あきれた顔つきをして話しました。

男は、途方に暮れはててしまいました。なお、そこごと口を探して歩きましたが、やはりいい口が見つかりませんでした。なお、そこごと口を探して歩きましたが、やはりいい口が見つかりませんでした。

「それは、一日も早くお国へお帰りなさいまし、まだ、お国のほうが、どんなに暮らし向きがいいかしれません。今年は、こちらは不作で困っています。」と、ある人は、男にいました。

男は、持ってきた金をすっかり遣い果たしてしまいました。しかたなくまた、山を越えて自分の村へ帰ろうとしました。

雪は、だんだん深くなつて寒く、そして腹は空いてきました。宿屋はあつても泊まる金もなかったのです。夜は寺の縁の下にガタガタと寒さに震えながら、寝たこともありませぬ。そのとき、男は、どんなに、いままで自分の家において気ままに暮らしていたことをありが

たいことだと思つたでしょう。

それよりか、男は、もう二日もなにも食はずにいました。腹が空いて、頭がぼんやりとして、どこをどう歩いてゐるやらわからずに、前へのめりそうなかつこうをして雪道をたどつていました。

そのとき、いままで、毎日、まずいものを食べてゐるのを不平に思つたことが、まちがつていたのを気づきました。

男は泣きたくなりました。またうらめしくなりました。家に帰ったら、腹いっぱい飯を食べようと考えました。

やつと村へ帰ると、いつか、旅へ出かせぎにゆけば困るようなことはないと教えてくれた人に出会いました。

「おまえさん、どこへいつておいでなすつた。旅へゆかれたという、うわさを聞きました。が、もう帰つてきなすつたのか。」と、その人は怪しみながら、見る影もない男のようすを見守つて問いました。

男は、なにかいいたかつたが、疲れやら、腹がへつてゐるやらで、なにも口がきけませんでした。ただ、その人の顔を見ると腹だたしくなつて、いきなり顔をたたきました。

その人は、びっくりして、飛びのきました。

「気が狂いなすつたのか？」

と、その人はわめきました。

男は、またとぼとぼと、のめりそうに歩いてくると、隣のおばあさんに出会いました。

「まあ、おまえさんは、どうして、そんなふうをして帰つてきなすつたか。ものもいえないのは腹がへつているからだろが、まあ、上がつて、ご飯をおあがんなさい。」と、おばあさんは、しんせつに男を自分の家に入れてお膳を出して、茶わんに飯を盛つてやりました。

男は、じつと茶わんをにらんでいましたが、いきなり、その茶わんを取つて投げ捨てました。そして、おばあさんのかたわらにあつたおひつを引つたくつて、頭からかぶりま

した。おばあさんは、びっくりして、あわてて家の外へ飛び出しました。

「だれかきてくれ！ 隣の人が気が狂つた。」と叫びました。

村の中は大騒ぎでした。そのとき、男の家の裏では、木に小鳥が止まって、おかしそ

うにさえずつていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」 講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おかしいまちがい

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>